北のとびら

30th
特別号
令和7年11月

HOKKAIDO ARTS FOUNDATION

表紙イラスト／小泉由美

発行／公益財団法人北海道文化財団　〒060-0042 札幌市中央区大通西5丁目11大五ビル3F
TEL.011-272-0501　FAX.011-272-0400　https://haf.jp

北海道文化財団の主な活動

道内の市町村や文化団体と協力し、地域の文化活動の支援や鑑賞機会の拡充など、幅広い事業を行っています。

北海道文化財団は平成6年11月に設立され、令和6年に30周年を迎えました。これを記念し、財団とともに北海道の文化芸術を支えてきた方々とこれまでの歩みを振り返り、次世代への引継ぎと財産とするため、情報誌「北のとびら」30周年特別号を発行します。

体験する

教育普及

第一線で活躍するアーティストが、道内各地の子どもたちと交流し、ワークショップや創作活動を行います。

こどもアート体験事業／アート体感教室

森山開次と子どもたち「リズムにのってカラダであそぼう」

アサダワタルと子どもたち「校歌のカラオケ映像をつくろう」

繋げる

文化交流

道内外の音楽、演劇、舞踊、美術等の文化芸術分野で活動する団体の相互交流活動を支援します。

文化交流事業

シベリウス生誕160年記念公演『Kullervo in HOKKAIDO』

新芸能集団 乱拍子 チュニジアツアー

伝える

文化情報の発信

道内の市町村やホール、文化団体等に情報交換を行う場を提供するほか、道内外の文化情報を広く発信します。

舞台芸術情報フェア　アートカフェ

情報誌「北のとびら」　文化情報ライブラリー／アートスペース

アートスペース企画展 vol.61 風間雄飛個展『おふたりやま』

ART CAFÉ vol.4 佐藤卓デザイントーク『デザインを水に聴く』

讃える

文化芸術等の顕彰

文化芸術やものづくり等の分野で活動する個人や団体を顕彰します。

北海道戯曲賞　ものづくり選奨

アート選奨

顕彰事業の合同贈呈式

創る

文化活動の支援

地域で行われる舞台芸術や美術等の文化芸術活動を支援します。

まちの文化創造事業

第7回帯広市民オペラ『アイーダ』

野外音楽フェス『OR DOOR 2024』(photo by akane)

観る

鑑賞機会の提供

道内のホール等と共催し、音楽・演劇・舞踊・伝統芸能等の舞台公演を、地域の皆さんにお届けします。

アートシアター鑑賞事業　主催公演

範宙遊泳『バナナの花は食べられる』札幌公演

育てる

人材育成

文化芸術やものづくり等の分野で活動する人材を育成します。

新進アーティスト育成事業（北海道戯曲賞等）

アドバイザー派遣事業　人づくり一本木基金事業

清水友陽 演劇ワークショップ

KENTARO!! ダンスワークショップ+ショーイング発表

北海道文化財団と関わりの深いアーティスト＆文化芸術関係者によるスペシャルインタビュー

Special interview 01

コンドルズ主宰
彩の国さいたま芸術劇場 芸術監督

近藤良平（こんどうりょうへい）

「アート体感教室」で
講師として10年以上に渡り
道内各地を飛び回った近藤良平さん。
出会いと自身の気づきを振り返ります。

コンドルズ主宰。ペルー、チリ、アルゼンチン育ち。第67回芸術選奨文部科学大臣賞、第4回朝日舞台芸術賞寺山修司賞、第67回横浜文化賞を受賞。NHK連続テレビ小説『てっぱん』オープニング、NHK大河ドラマ『いだてん』ダンス指導など、映画、TV、CMで多数の振付を手がける。2022年4月より彩の国さいたま芸術劇場の芸術監督に就任。

ダンサーとしての僕の活動は大きく分けて二つの側面があります。一つは舞台で作品を発表する「表現者としてのダンス」、もう一つは「コミュニケーションツールとしてのワークショップ」です。

僕が後者の活動として、北海道文化財団のアート体感教室で奥尻町を訪れたのは２００８年のこと。初めて足を踏み入れたその町は、米や畑があり、牛が行き交い、豊かなものが全て揃っている完璧な土地でした。その居心地良さと豊かな自然、町民の皆さんや子どもたちとの出会いで、奥尻町が一気に好きになりました。

当時、ストリート系ダンスを筆頭にダンスそのものの認知は広がりつつありましたが、コンテンポラリーダンスはまだまだマイナーな分野。未知の土地で、未知のコンテンポラリーダンスをある種「開拓」していくような「始まり」を感じ、僕自身もワクワクしていたと思います。

奥尻町では2日間に渡りワークショップを実施。3日目はミニ発表会として映像に残し、みんなで鑑賞しました。自分たちが動いている姿を見る子どもの目は輝いていました。

気軽に芸術に触れられない土地に赴き、表現方法の豊かさを伝えることに意義を感じる一方で、町を歩き人と交流を重ねると、僕が知らなかっただけで、土地それぞれの文化が根付いていることを知りました。そこに無理やり東京の文化をねじ込むのではなく、共存することの大切さを、僕自身も気づくことができました。

奥尻町を皮切りに、新冠町、中標津町、浦河町など、10年以上に渡り、道内各地を巡りました。僕が伝えたかったことは、コンテンポラリーダンスという自由な表現方法があるということ。「こんな身体の動かし方があるんだよ」「身体を使って真剣にふざけてみよう」と、身体を動かす楽しさや表現の多様さを伝えていきました。

奥尻町に行った当時、僕はまだ30代でしたが、今はもう50代。この年代の大人がエネルギーを発散しながら真剣にふざけている姿を見せることで、「こんな生き方もあるんだ」と子ども心に思ってくれるのではないでしょうか。コンドルズも来年で30周年。まだまだ学ランを着てダンスをしているわけですから（笑）。継続してきたからこそ、その時、その時の自分自身にできることの変化も見えてきました。

道内各地で蒔いたダンスの種のようなものが、今はどう育っているのか。ダンサーになったり、この業界に入るということに直結しなくても、彼らの人生にささやかでも影響を与えていたら嬉しいです。北海道文化財団と共に、また何か楽しいことをしてみたいと思っています。

ロング版インタビューをWEBで公開中

Special interview 02

マームとジプシー主宰
劇作家

藤田貴大（ふじたたかひろ）

「アートシアター鑑賞事業」などで、
何度も道内をまわったマームとジプシー。
主宰の藤田貴大さんが、
地方公演に対する思いを語ります。

2007年の劇団旗揚げ以来、象徴的なシーンを別の角度から見せる「リフレイン」という手法で注目を集める。2012年『かえりの合図、まってた食卓、そこ、きっと、しおふる世界。』で岸田國士戯曲賞、2016年『cocoon』で読売演劇大賞優秀演出家賞を受賞。エッセイや小説なども発表し、活動は多岐にわたる。2020年には初の小説集を上梓。

北海道の伊達市で生まれ育った僕にとって、観劇は特別なことでした。母と札幌まで観に行った『オペラ座の怪人』は、労力を費やして得た特別な体験として今も鮮明に心に残っています。伊達市には小学生の時にカルチャーセンターができて、著名な劇団の公演が時々行われるようになりました。これは、北海道文化財団のおかげでもあったのだと今は思います。

上京して驚いたのは、東京の人々が必ずしも日常的に演劇を観ているわけではないということ。むしろ、演劇が「溢れていない」環境で育った僕の方が、演劇部の部室にあったＶＨＳや雑誌を貪欲に観漁っていました。この「足りないからこそ必死に求める」という経験は、悔しさもありましたが、自身の力にもなったということを、北海道で暮らす子どもたちにも伝えたいです。

僕が主宰するマームとジプシーは、これまで北海道文化財団の主催公演などで何度も北海道で公演を行ってきました。北海道での公演は僕を原点に立ち戻らせ、そのたびに「18歳までの自分に、今の僕が作った演劇を観せに行く」つもりで臨んでいます。

20代で「面白さ」を追求した僕は、やがて、どうすれば人の心に「残る」のかを考えるようになりました。数年後に「あの芝居で言っていたことって、今のこの状況のこと?」と気づくこともあるかもしれません。僕はこれを「リフレイン」と呼び、観客の心の中で作品が繰り返し再生されるような演劇を作りたいと思っています。

演劇は、ドラマや映画とは違い、役者も観客も、その日その時、同じ場所で呼吸をする「今」この瞬間にしか存在しません。この「今」を大切にする意識は、社会情勢が目まぐるしく変わる現代において、ますます重要になっています。再演する際、作品中の「戦争」という言葉の意味合いが、数ヶ月前と今とで全く違って受け取られることがあります。その時代の情勢は作品に付随してしまいます。だからこそ、どんな観客にも、そして子どもたちにも、「今」をどう見せるかを常に意識して作品を作り続けています。

一方で、もっと多くの子どもたちに観劇してほしいけれど、なかなかそうはならない現状もあります。チケット料金の高騰もその要因かもしれません。都内でもそれは痛感しますが、北海道では普段演劇を観ない子たちが足を運んでくれる印象もあります。士別市では、野球少年団の子どもたちが観劇をしてくれたり。より多くの人たちに観劇体験を届けたい。そのためにはどうすべきか。北海道文化財団と共にあらゆる可能性を模索していきたいと思っています。

ロング版インタビューをWEBで公開中

北海道文化財団と関わりの深いアーティスト&文化芸術関係者によるスペシャルインタビュー

Special interview 03

株式会社カンディハウス
代表取締役会長
藤田哲也（ふじた てつや）

未来のものづくりを支える
「人づくり一本木基金」。
設立以来、運営委員を担う
藤田哲也さんに話を伺いました。

1982年カンディハウス（旧・インテリアセンター）に入社後、設計・営業を経験。1998年には、グループ会社のカンディハウス横浜を設立した。専務取締役を経て、2013年より代表取締役社長、現在は代表取締役会長。2021年からは旭川家具工業協同組合理事長も務めるなど、多岐にわたる要職を歴任している。

2025年、「人づくり一本木基金」は設立から10年を迎えました。

この基金は、長年カンディハウスの家具を手がけてくださったデザイナー、スチウレ・エング氏の「もう十分デザインロイヤリティをいただいた。これからは若い人たちのために使ってほしい」という一言から始まりました。エング氏の温かい心に感銘を受けたカンディハウス創業者の長原實は、この寄附を若い才能の育成に活かそうと考えました。しかし、会社内だけで運営するのは難しいと感じ、北海道文化財団理事長の磯田さんに相談。長原自らの私財も投じ、2015年に基金を設立しました。

長原は、経営者であると同時に、一人の優れた技術者でもありました。若い頃に西ドイツへ家具製作の研修に行った経験から、若者の育成こそが未来を拓くという強い信念を抱いていました。カンディハウス創業以来、若い技術者たちの育成に尽力してきた長原にとって、この基金は長年の思いが形になったものです。基金設立と同じ年に長原は生涯を閉じましたが、病床で「基金ができて嬉しい」と語った姿は今も鮮明に心に残っています。

その志を受け継ぎ、私はカンディハウス代表取締役会長として基金の運営委員を務めています。毎年届く奨学金や海外研修の応募書類には、経済的な苦境を乗り越え、ものづくりに情熱を燃やす若者たちの切実な思いが綴られており、すべてを応援したい気持ちになります。

「人づくり一本木基金」の奨学金は返済不要の給付型です。これにより、アルバイトに費やしていた時間を学業や創作に充てることができたという喜びの声を聞くたびに、この活動に携われることへの感謝がこみ上げてきます。支援を受けた若者たちは現在、技術者として道内外で活躍し、中にはカンディハウスに入社した者もいます。これまでに5名が海外研修でスウェーデン等に渡り、大きく成長して戻ってきました。

素晴らしいデザインの家具が生み出す収益が次の世代の奨学金となり、若い才能を育んでいく。エング氏から始まったこの美しい循環は、今も続いています。設立当初は手探りでしたが、今では多くの高校や大学、専門学校で紹介され、応募数も増えました。北海道文化財団の協力もあり、安定した運営を続けています。

今後は、若者を育成する企業や団体への支援にも力を入れていきたいと考えています。こうした環境を支え、整えることも、基金の重要な役割であると考えています。

ロング版インタビューをWEBで公開中

Special interview 04

MONO代表
劇作家・演出家・脚本家
土田英生（つちだ ひでお）

次世代を担う才能を発掘する
「北海道戯曲賞」の魅力と価値とは。
第1回から6年間に渡り審査員を務めた
土田英生さんが語ります。

愛知県出身。1989年に「B級プラクティス」（現MONO）を結成。戯曲『その鉄塔に男たちはいるという』でOMS戯曲賞大賞、文学座公演『崩れた石垣、のぼる鮭たち』で芸術祭賞優秀賞を受賞。映画『約三十の嘘』、ドラマ『斉藤さん』など脚本も多数。監督・脚本を務めた映画『それぞれ、たまゆら』が2020年に公開された。

撮影協力／京都芸術センター

「北海道で新たな戯曲賞を立ち上げるので、協力してほしい」。北海道文化財団さんより相談を受けた僕は、2014年度の第1回から2019年度の第6回まで、北海道戯曲賞の審査員を務めました。

この戯曲賞の最大の魅力は、「北海道」を冠しながらも、地域を限定せず全国から作品を募集していること。芸術は排他的であってはならず、自分の地域だけで完結させると広がりがなくなってしまいます。実際、第1回大賞作品『悪い天気』の藤原達郎さん（飛ぶ劇場）も福岡の劇作家。道内作家も応募する中で、北海道枠を設けずに公平に審査する開かれた姿勢は、道内作家にとって良い刺激になっていると感じています。

第1回はスムーズに大賞が決まったものの、第2回から2年連続で大賞は「該当なし」となりました。立ち上げたばかりの賞ですから、関係者の皆さんの気持ちも痛いほどわかります。それでもこの結論に至ったのは、僕だけでなく、審査員全員が「北海道戯曲賞のレベルを下げたくない」という覚悟を持っていたからです。単なる相対評価ではなく、本当に優れた作品にこそ賞を与えるべきだと思ったのです。この判断は、賞の価値を守るために不可欠でした。

劇作家は「売れたいという俗っぽい野心」と、「純粋に良い作品をつくりたいという気持ち」を行き来しながら成長するものだと考えています。だからこそ、大賞は「商業的にも通用する資質を持つ、うまい作品」に与えるべきだと考えていました。賞を受賞し、そこから売れていくという明確な道筋がなければ、みんな夢を抱きにくくなってしまう。僕はこの賞を、将来的に劇作家という職業で自立し、活躍できる人たちを輩出する場にしたかったのです。

現在、北海道の劇作家は大賞を受賞していませんが、いつか道内作家が大賞を受賞し、日本の演劇界のメインストリームで活躍するという物語が是非とも生まれてほしい。「北海道にいながらでも成功できる」ということを信じられる物語を、誰かが作る必要があると僕は思っています。

大賞作品は、札幌で上演しますが、東京や大阪といった主要都市も巡り、そこで評判を得ることができれば、「北海道戯曲賞の大賞作品は面白い」と認知が広がり、賞の価値はさらに高まるでしょう。北海道戯曲賞は審査員として参加していても風通しがよく、審査会も非常に良い雰囲気でした。この戯曲賞がこれからも続いていくためにも、そういった成功の物語や新たな展開が生まれることを期待しています。

ロング版インタビューをWEBで公開中

アーティスト × まちの担い手

往復書簡

事業を通して交流をした
アーティストとまちの担い手が
互いにこれまでの活動を振り返る

中標津町文化スポーツ振興財団 家政美香より

事業概要

まちの文化創造事業として、2023年から2025年までダンサーの仙庭弘晶が、中標津町総合文化会館の開館30周年記念公演を目指し、中標津町で振付・ダンス指導を実施した。

仙庭弘晶（せんばひろあき） さま

『ダンスショーケース@中標津～繋がる未来～』にお力添えいただき、心より感謝申し上げます。

令和5年から始まった本企画も、今年で3年目を迎えました。1年目は、表現する楽しさや仲間とのつながりを大切にしながら活動を進め、想像以上の成長が見られました。2年目のプレ公演では一体感のあるフィナーレを演出し、表現に深みが増し、観客からは「迫力と一体感がすごい」「感動した」との声をいただき、新たな手応えを感じることができました。

仙庭さんが常に寄り添いながら導いてくださる姿勢は、参加者はもちろん運営側にも大きな学びとなり、地域に新しい風を吹き込んでくださいました。

いよいよ今年は本公演。本公演では、中標津町総合文化会館の開館30周年を記念し、「ダンスでつなぐ未来と30年の足跡」をテーマに開催します。これまで積み重ねた表現や関係性の集大成を舞台という“物語”に昇華させる年となります。

中標津町の澄んだ空や広がる風景を思い描いて制作されたオリジナル楽曲に、歌詞や地域の情景を重ね合わせ想いを込めた振付を創作してくださいました。世代を超えて楽しめる作品となり、この取組が次世代へとつながることを願っています。地域に根づく文化として未来へとつなげていけるよう、丁寧に取り組んでまいります。

また中標津町でお会いできる日を、心より楽しみにしております。

ダンサー 仙庭弘晶より

家政美香（かせいみか） さま

2018年秋に初めて中標津町を訪れた際、広大な牧草地の風景に圧倒されました。当初はこの地でダンスがどのように根付いているのか想像できませんでしたが、ワークショップで出会った皆さんの情熱に驚かされました。その後コロナ禍を経て、中標津町総合文化会館しるべっと30周年に向けた3年計画の企画に携わらせていただいております。

初年度は未経験者向けのワークショップを実施し、多くの方が参加してくださいました。年齢や経験を問わず真摯に踊りへ向き合う姿に、私自身も大きな刺激を受けました。2年目のプレ公演では、自らの表現を追求し、観客に感動を届ける参加者の姿に確かな手応えを感じました。ダンスを通じ、人と人、地域を結ぶ温かなコミュニティがあることを実感しています。

この事業を通じ、地域に赴くことの意義を改めて考えるようになりました。技術を伝えるだけでなく、共に創造し、成長し、化学反応を起こすこと。そして、その土地の文化や人々に触れることで、自らの表現の幅も広がっていくことを強く感じています。

地元の皆さま、北海道文化財団の皆さまの温かいご支援に心より感謝申し上げます。いよいよ迎える3年目の本公演では、皆さんの熱意を胸に最高の舞台を創り上げたいと願っております。この舞台が未来へと続くダンスの芽を育み、地域に根付いていくことを心から期待しています。

あさひサンライズホール 漢 幸雄より

事業概要

2003年から始まった市民参加劇『体験版 芝居で遊びましょ♪』。2025年8月にまちの文化創造事業として開催された最終公演は、プロとアマチュアの役者が共に稽古し創り上げた。

田村孝裕（たむらたかひろ） さま

冠省

北海道のド田舎の小さな劇場と、東京の演劇界のトップ集団を走っているONEOR8が1か月近くに及ぶ滞在で、地域のアマチュアと芝居を創る日が来るなんて。縁などというものはどこに転がっているものかわからぬものです。

地域の人たちに舞台に立つ楽しさと苦しさを体感してもらいたいと始めた『体験版 芝居で遊びましょ♪』。ささやかな伝手を頼って演出を依頼したのが2017年度。真冬の北海道、コンビニもない限界集落での自炊。よく引き受けてくださったものだと感謝しています。

その年のONEOR8公演『ゼブラ』は全国ツアーになるということもあり、当地で作った大道具で全国を廻っていただきました。

アマチュア相手の芝居創りはプロを相手にするのとは異なる苦労があったのではないかと思います。ファイナル公演『かれこれ、これから』の観客アンケートでは質の高さや継続を望む声が多数を占め、これからも舞台を創る事業は続けなくてはと感慨を新たにしています。

この23年間で事業に関わった方は1,000人を超えます。特にスタッフはいくつものグループが立ち上がりましたし、劇団が2つ産声を上げました。意外なことに結婚した人が10組以上います。舞台上のコミュニケーションのおかげでしょうか。

競争の激しい東京で第一線を走り続けることがいかに難しいか。それでもご自愛の上、益々のご活躍を祈らずにはいられません。

再会鶴首

ONEOR8 田村孝裕より

漢 幸雄（はたゆきお） さま

10年ほど前に『体験版 芝居で遊びましょ♪』のオファーを受けたとき、正直なにをするのかさっぱりわかりませんでした。当時、劇団の地方公演を視野に入れていた私は「その足がかりになるなら」という下心のみで引き受けたのをよく覚えています。

1月の北海道、週に一度の買い出し以外は家と劇場の往復のみ。この芝居漬けの毎日が稽古好きの私には最高の環境でした。特に学びも多かった。プロが相手なら言わなくてもわかることを市民の方たちには噛み砕かなければ伝わらず、芝居の根幹に関わるようなダメ出しも多くしました。おかげで演出の引き出しが増えましたし、何より俳優たちの吸収力がハンパなく、芝居は技術よりも“舞台上でいかに本気になれるか”が大事だと教えてもらいました。芝居の原点を士別市で目の当たりにしたのです。

以来、劇団公演では何度も士別市にお邪魔し、私を『体験版 芝居で遊びましょ♪FINAL』に呼んでくださったのを光栄に思う一方で、やはりこの事業が終わる寂しさがつきまとっています。出演者やスタッフはノーギャラ、仕事や子育てに追われながら、稽古で苦しみつつ楽しそうにやっています。漢さんがよく仰っている「生活を豊かにする」時間と空間がここには確実にあります。私は“面白い芝居を作り続ければ活動は継続する”をモットーにこれまでやってきました。また事業の再開を願って、面白い芝居を作る所存です。

アーティスト × まちの担い手

往復書簡

事業を通して交流をした
アーティストとまちの担い手が
互いにこれまでの活動を振り返る

事業概要

まちの文化創造事業として、2019年より任泰峰さんを招いて千歳市民ミュージカルを創り上げた。2025年11月に第5回目となる公演『文の見た空』に向けて現在も稽古中。

釣 晴彦より

千歳市民ミュージカル実行委員会

任 泰峰（にん たいほう） さま

千歳市の歴史は、芝居として面白い題材が沢山あります。任さんは、千歳空港の歴史なら書けると言ってくれて、2020年1月に『文（あや）の見た空』を初めて上演する運びとなりました。

「演劇」だけでは千歳市民を魅了する力が弱いので、任さんが提案する「千歳市民ミュージカル」として実行委員会を立ち上げ役者を公募してスタートさせました。千歳で舞台を市民が継続していくには、練習場所や資金の面で苦労はありますが、任さんの台本、演出だからここまで継続できました。千歳の歴史を舞台にすることに、大きな反響がありました。上演の回数が増えるごとに携わる人が増え、今や世代や立場を超えたつながりができました。10代から80代までの人が関わっています。任さんは、舞台美術、照明、音響、衣装などを組み合わせて、何もない空間に独自の創造世界を演出する才能のある人です。舞台はやり直しのきかない一回勝負だと語ります。他者のナラティブを自分のナラティブと重なり合わせ演出する任さんの舞台に皆が魅了されていく姿を観続けてきました。2025年11月に上演する『文の見た空』は、3回目の上演になりますが、歴史的事実を大切にしつつ、ドラマとしての面白さをどのように演出していくか、任さん演出の舞台を楽しみにしています。2026年で千歳空港が開港して100年の節目を迎えます。今回の上演は「今」を生きる私たちの生活にも共感するナラティブになることを強く信じています。

任 泰峰より

演出家

釣 晴彦（つり はるひこ） さま

普段電話やメールで連絡を済ましている釣さんへの手紙、正直少々こそばゆいものがあります。

第5回のミュージカル『文の見た空』もキャスティングの発表、本読みと進み、只今盆休み。思い返してみれば釣さんと頻繁に連絡を取り合っているとは言うものの、ほとんどが業務連絡。芝居の中身については、お疲れ会の流れで話し合う時間があったような気がします。

近況報告。今回の出演希望者もなかなかのものですよ。何よりも楽しんでいる。それが出来るのがココのいいところだと思います。ご存じの通り僕の稽古場ではすべてがコロコロ変わります。セリフも動きも変わります。「また変わった」出演者の聞えよがしな呟きが聞こえます。「当り前だろう、昨日の俺は今日の俺じゃないんだ」と、訳のわからない僕の言い訳が続きます。いい稽古場はいい作品を生みます。段取りや言い回しに動きや表情、失敗を恐れずに舞台に乗せる。そうして、いよいよ発表会です。舞台公演はワクワクドキドキしなきゃ。

僕は笑い声が聞こえない稽古場が苦手です。失敗を許さない緊張感が大嫌いです。人は失敗を繰り返すことで理解し、笑うことで心を開くのだと思います。エネルギーと解放を笑いから貰うのです。だから稽古場にこの2つは必須です。僕の仕事は笑いと失敗があふれる、そんな稽古場にすることだと思います。

事業概要

2016年、2018年に実施した網走市西が丘小学校でのこどもアート体験事業。柴幸男さんが同校の6年生と共に3日間のワークショップで演劇作品を創作し、最終日に発表会を行った。

佐野正樹より

元・網走市立西が丘小学校教諭（現・北見市立三輪小学校主幹教諭）

柴 幸男（しば ゆきお） さま

佐野正樹です。ご無沙汰しています。

子どもたちが「ホンモノ」に出会ったとき、その心に大きな変化が生まれると信じてきました。そして、その機会をつくること、時には人や活動を紹介してつなぐことも、担任としての大切な仕事だと思っています。その思いを形にできたのが、北海道文化財団「こどもアート体験事業」での柴さんの学習でした。

少人数で人間関係が固定化しがちな子どもたちも、アイスブレイクや短い劇のワークショップで声を出し、体を動かすうちに、「受け止めてもらえる」という安心感が少しずつ育っていったように感じました。さらに、総合的な学習で学んだ地元のホタル保護活動を題材に、一部台本を自分たちで作り演じるという挑戦もしました。地域の方々の思いを知り、それを自分たちの言葉で伝える舞台。劇が終わってからの子どもたちの達成感に溢れた姿は、今も心に残っています。

こうした経験のよさを実感し、同僚の大槻先生に紹介したことから2018年の活動につながり、2度も来ていただく機会をいただけました。「ホンモノ」のアーティストの存在が子どもの可能性を大きく広げることを強く感じましたし、自分自身も教師として成長することができて感謝しています。貴重な経験をありがとうございました。

追伸：いろいろな場所で何度かお会いする機会がありました。また、どこかでお会いできたら嬉しいですし、一緒にお仕事ができたらさらに嬉しいです。その日を楽しみにしています。

柴 幸男より

ままごと主宰 劇作家・演出家

佐野正樹（さの まさき） さま

ご無沙汰しております。先日、東川町で偶然お会いしたときは本当に驚きました。お元気でお過ごしでしょうか。家族と北海道に移住して4年目を迎え、息子たちも小学生となり、今では彼らの学芸会を手伝うこともあります。そんな折々に、西が丘小学校でのワークショップをよく思い出します。

最初のワークショップでは、私もまだ若く未熟で、迷いながら子どもたちと向き合っていました。ある生徒が自分の表現をなかなか出せずに悩んでいたとき、とにかく待ち続け、その先に彼女が勇気を持って一歩を踏み出した瞬間に立ち会えたことは、今も鮮明に覚えています。そして「保育園から中学校まで一緒だからキャラクターや関係性が固定されてしまう」という先生の言葉は、地域で子どもたちと表現を考える上での大きな学びとなりました。私は今も、地域で仕事をするときは一種の旅人として、ほんの少し変化の風を吹かせられればと心がけています。

2度目のワークショップでは、アシスタントによる教室での一人芝居から子どもたちが参加する演劇へとつなげました。鑑賞と創作を一連で行うあの方法の手応えは今も大切にしていて、北海道各地での活動にも受け継いでいます。

実はこの手紙を書いている今日、先生に連れて行ってもらったさくらの滝を家族で再訪しました。あの時と変わらず沢山の鱒が滝を登っていました。能取湖のサンゴ草もずっと気になっております。いつかまた訪れ、先生とお話できる日を楽しみにしています。

Artist 現在地

北海道文化財団との関わりを起点もしくは通過点として、様々な分野で活躍するアーティストが現在までを振り返ります。

～「北海道舞台塾」で演劇の創作活動やワークショップの講師を経験～

イレブンナイン代表 俳優・演出家・劇作家

納谷真大

MASATOMO NAYA

Profile

札幌の演劇ユニットイレブンナイン代表。早稲田大学卒業後、富良野塾などを経て役者として活動を開始。2001年、戯曲作『EASY LIAR!』で北の戯曲賞優秀賞を受賞。2004年にイレブンナインを結成し、2007年の『あっちこっち佐藤さん』でライフコート札幌舞台芸術賞演劇大賞を受賞した。俳優としては、イレブンナインや富良野GROUPの他、ドラマ『やすらぎの郷』、札幌文化芸術劇場hitaruでの『ゴドーを待ちながら』などにも出演。2024年に開館したジョブキタ北八劇場の芸術監督を務めている。

2008-2011 トピックス 2008年北海道舞台塾スタート

2007年『あっちこっち佐藤さん』で、TGR札幌劇場祭の大賞を受賞！したのですが……このことが契機となりイレブンナインとしての富良野での活動を、師匠である倉本聰から認められなくなってしまい……。活動の拠点を札幌に移すことになったのですが、どうやって劇創作をしながら生きていけば良いのかと、途方に暮れておりました（笑）。

そんな中、北海道文化財団より「北海道舞台塾」の話をいただき、本当に目の前が開けたような気がしました。舞台塾をきっかけに、新たな出会いもたくさんあって、「札幌で劇を創りながら生きていけるのかもしれない！」と思うことができました。

▲北海道舞台塾・ワークショップの様子

2012-2023 トピックス 2014年『12人の怒れる男』公演

▲『12人の怒れる男』（2014年）　撮影／クスミエリカ

「北海道舞台塾」での4年間にわたる創作活動や、道内各地でのワークショップ講師派遣を通じて、創作の幅や知識・技術、人脈が大きく広がりました。演技については富良野での学びが私にとってのすべてですが、演出においては「北海道舞台塾」で札幌のプロフェッショナルの方々から多くを学び、その経験があったからこそ、演出家としての今の私があると感じています。

2014年には転機となった『12人の怒れる男』を上演。動員の増加をきっかけに劇団公演に加えてプロデュース公演の道も開けました。教文短編演劇祭での3連覇も、札幌での演劇活動における大きな勲章です。

2024-2025 トピックス 2024年北八劇場芸術監督就任

2024年、北八劇場の芸術監督に就任しました。まさか自分が、劇場の芸術監督になるなんてことを微塵も想像していなかったし、当時、北海道演劇財団理事長の斎藤歩さんから打診があった時も、即答でお断りしました。「僕には無理です！」と、「歩さんがやるべきです！」と。

それから、何度も何度も札幌のこれからの演劇について歩さんと話を重ね、北八劇場支配人の伊藤久幸さんがバックアップしてくださることになり、「それならば私にもできるかもしれない」ということで、今があります。

北海道の舞台芸術は、ハード面では恵まれている一方、ソフト面では新しい才能が育ちにくい状況にあると感じています。これはコロナ禍だけでなく、演劇や演技を基礎から学べる場所が少ないことも一因だと考えます。なので、私が北八劇場に関わる限り、新しい才能、新しい人財に出会うために、様々な取組を続けようと考えています。

▶ジョブキタ北八劇場主催・こけら落とし公演『あっちこっち佐藤さん』（2024年）
撮影／クスミエリカ

～「芸術家海外研修事業」の奨学生としてウィーンで研修～

仁木こどもヴァイオリン教室主宰 札幌交響楽団ヴィオラ奏者

仁木彩子

AYAKO NIKI

Profile

兵庫県出身。4歳からヴァイオリンを始め、相愛大学附属ジュニアオーケストラ等に所属。大阪教育大学を卒業後、2002年に札幌交響楽団にヴィオラ奏者として入団。2005年には北海道文化財団の芸術家海外研修事業奨学生としてウィーンに留学し、帰国後にリサイタルを開催。ヴァイオリンを東儀幸、稲垣琢磨、ヴィオラを竹内晴夫、ハンス・ペーター・オクセンホーファーの各氏に師事する。現在は札幌交響楽団でヴィオラ奏者として活動する傍ら、2013年から自宅でヴァイオリン教室を開き、後進の育成にも力を入れている。

トピックス 2005年ウィーンに留学 2005-2006

札幌交響楽団にヴィオラ奏者として入団した3年後の2005年、北海道文化財団芸術家海外研修事業の奨学生としてウィーン国立音楽大学に留学しました。この年は偶然にも、ウィーン国立オペラ座50周年と、モーツァルト生誕150周年という特別な時期。至る場所で音楽イベントが開かれていて、街中に音楽が溢れていました。日本ではなかなか見ることのできないオペラを格安で見られるので、上演されているものは全て見ていました。

スペインやチェコ、ハンガリー、ドイツなど様々な国への旅も経験し、現地の音楽文化に触れる貴重な1年間でした。

▲友人や自身が描いたイラストなど、留学時代の思い出を今も大切に保管しています。

トピックス 2013年ヴァイオリン教室を開始 2007-2013

帰国後、小平町の旧花田家番屋で行われた北海道文化財団主催の『番屋音楽祭モーツァルトの調べ』など、多くのコンサートに出演しました。また、札幌交響楽団での活動も本格化させていきました。

2010年に結婚、翌年には長女が誕生。子育てを通して「子どもに音楽を」という思いが芽生え、2013年に自宅で子ども向けヴァイオリン教室を開講しました。

個人の活動としては、2013年には絵本作家のあべ弘士さんと『0才から楽しむ音の絵本』も開催。札幌交響楽団の活動と教室の運営、子育てと、忙しくも自身の技術も磨き続ける日々でした。

◀『あらしのよるに』をはじめとした名作を生み出した元・旭山動物園の飼育員である絵本作家のあべ弘士さんと共に開催したコンサート

トピックス 2022年『はじめてのヴァイオリン』スタート 2014-2025

教室の運営と並行して、個人のコンサート活動にも取り組み、2015年と2016年には『仁木彩子　ヴィオラの時間』と題したリサイタルを開催しました。

◀『はじめてのヴァイオリン』の様子。対象は1歳から園児までで、ヴァイオリンの構え方や音の出し方など、ゲーム感覚で楽しく学びます。

長女が中学生になり子育てが一段落。自身の経験から、子育てをされているお母さんたちの閉塞感や大変さが少しでも軽減されれば良いと思い、2022年からは月に一度、ササキホール（札幌市）でリトミックを取り入れた子ども向けの『はじめてのヴァイオリン』も開催しています。また、臨床心理士としてご活躍されている東條真希さん（北海道大学客員研究員／東京大学特任助教）の協力を得て「当事者研究会」を主宰。これは、子どもたちへのヴァイオリン指導に悩んだ際、「心理学からヒントを得られるのでは」と考えたことがきっかけで始まったものです。

後進の育成、札幌交響楽団での活動、個人でのリサイタルなど、今後も音楽と関わり続けていきたいです。

Artist 現在地

北海道文化財団との 関わりを起点もしくは通過点として、様々 な分野で活躍するアーティストが現在 までを振り返ります。

～「人づくり一本木基金事業」の奨学生としてポーランドで研修～

鹿児島大学大学院在学

吉田敬子
KEIKO YOSHIDA

Profile

北見工業大学在学中の2023年、北海道文化財団「人づくり一本木基金」の海外研修支援事業の奨学生としてポーランドのクラクフ工業大学建築学部へ交換留学。卒業後は、鹿児島大学大学院で建築意匠分野を専攻。交通工学の視点を融合させながら、道路の「ラウンドアバウト」の仕組みを応用した新しい建築空間の可能性を探求している。これまでの主な活動実績として、『宗像みあれ芸術祭』アート作品出展（制作中）や、国際建築デザインコンペTOP20選出、日本建築学会設計競技北陸支部入選などがある。

～「文化交流事業」で韓国の芸能団体と交流～

新芸能集団 乱拍子 総合演出

村場 踊
ODORI MURABA

Profile

小学校1年生から舞台に立ち、5年生で日舞を習い萩井流の名取となる。その後、人形浄瑠璃、舞台音楽、演出、アフリカンパーカッションなどの分野で専門家の方々に師事し、20歳頃から乱拍子の総合演出としての活動を始める。2015年には北日本太鼓フェスティバル大太鼓の部で優勝。2021年の『KITAKAGURA　大地の灯トリエンナーレ』、2022年・2023年の文化庁『伝統文化体験フェスタ』など、多岐にわたる公演やイベントで総合演出・ファシリテーターを務めている。海外公演も多数。

幼少期-2017　トピックス 2017年高校の放送部にて放送局長に

子どものころから絵を描くことが好きで、小学校での得意な教科は図工でした。

中学では美術部に所属し、コラージュ作成に夢中。教師から褒められたことで、より一層創作が好きになりました。

高校では、放送局に所属し、放送局長に。放送コンテストに向けて、番組制作では企画から取材、撮影、編集までをそれぞれグループで役割を決めて担当し、一つの「作品」を創り上げる楽しさを学びました。

中学生までなんとなく好きだった芸術分野が高校の部活動での経験を経て、明確に「ものづくり」への興味の扉を開くきっかけになりました。

◀放送局長だった高校時代。高文連放送コンテストで総合部門1位に輝きました。

2018-2023　トピックス 2023年ポーランドへ交換留学

▲留学中、期末試験後に友人とピクニック

高校卒業後、北見工業大学の地球環境工学科に進学。大学4年次に北海道文化財団「人づくり一本木基金事業」の海外研修支援事業の奨学生として、ポーランドのクラクフ工業大学建築学部へ交換留学したことが転機となりました。専攻していた交通工学の枠を超え、社会インフラをデザインの側面から捉えたいと考え、建築を学ぶことを決意。

特に印象的だったのは、ドイツのケルン大聖堂です。駅を出てすぐ目の前に現れる巨大な建築物と、そこで人々がくつろいでいる光景。長きにわたり人々が創り上げてきた建築物が街のシンボルとなり、人が集まる空間を生み出すことに深く感銘を受けました。

2024-2025　トピックス 2025年鹿児島大学大学院に進学

留学中、在籍していたクラクフ工業大学建築学部のスタジオ課題では、キャンパス中庭のパビリオン設計や、ポーランドの小さな町に一戸建て住宅を設計提案しました。ポーランド人の友人と意見を交わしながら、設計提案の密度を高めていく中で、人が過ごす空間づくりに魅了されていき、今後もより深く建築設計に自らが携わりたいと考えるようになりました。

学部卒業後は鹿児島大学大学院に進学し、建築意匠分野を専攻。『宗像みあれ芸術祭』への作品出展、海外建築ワークショップへの参加（ノルウェー科学技術大学、京都大学合同）、国際建築デザインコンペTOP20選出、日本建築学会設計競技北陸支部入選など、北海道文化財団の支援によって、建築の設計・研究活動に1日の大半を費やすことができています。現在は、建築×交通工学から新しい建築の可能性を考え、研究を進めています。

▶国際建築デザインコンペTOP20選出作品『ECO TONE HOTEL』。ガラパゴス諸島に点在する未完成の建物を活用した提案です。

トピックス 2016年韓国・光州市に派遣　2016-2018

▲2016年、韓国・光州市に訪問公演した際の写真

2016年、北海道文化財団の文化提携交流事業で、韓国・光州市の『無等（ムドゥン）響きフェスティバル』に派遣されました。ちょうど、立ち上げメンバーの第一世代から、第二世代の私に舞台創作のバトンが渡されたタイミングでもありました。光州文化財団の理事長と、歌の交換や踊り、笛を通して自然に仲良くなっていったことが今でも心に残っています。2017年には韓国の伝統芸能団体「伝統演戯遊び研究所」を招き、2018年には韓国ソウル市で世界の数十ヶ国のアーティストが参加する「ソウルフレンドシップ」で演奏を披露。自分自身が実演家であると共に、芸能の「輪」と「和」を拡げていく芸能家としての知見が深まった3年間でした。

トピックス 2022年地域文化協働事業で東川町へ　2019-2024

海外公演を通して得たものは、芸能家として社会問題と向き合う視座。人種や階級の差別、言葉の壁、歴史の痛みなどに、音や踊りで向き合うことの大切さに気づかされました。

2022年には、地域で暮らす外国人留学生や住民の方々に、和太鼓等の伝統芸能の魅力を広く伝えることを目的に東川町で公演を行いました。

この経験で私は、文化芸術が心を伝え合うプラットフォームであることを再認識。太鼓の音に乗せて「元気でいてね」「来てくれてありがとう」といった思いを届けることが、私たちの仕事だと考えています。

▲東川町で実施した公演の様子

トピックス 2025年韓国から招聘、11年ぶりの座長公演　2025

2025年5月、北海道文化財団文化交流事業の助成を受け、韓国の『ムドゥンウルリム祭り』に参加しました。太鼓と獅子舞に殺陣を取り入れたパフォーマンスを披露しましたが、制作過程では「刀は韓国の人にとって良いイメージではないかもしれない」という議論も。時代が変わっても、相手を思いやる気持ちが大切だと再認識する機会となりました。

現在、乱拍子は第三世代の育成と、第二世代への本格的な継承を進めています。

私たちは、芸能は一人で継ぐものではなく、人と人との「輪」と、調和の「和」で継ぐものだと考えています。もちろん核となる存在は必要ですが、私たちの芸はそもそも一人では成り立ちません。相手がいて、初めて自分がいるのです。

11月には第三世代の長谷川聖尚の座長公演も控えています。座長公演は乱拍子としては11年ぶり。私も演出・作曲・振付など忙しい日々を過ごしています。

◀11月に控えた座長公演にむけて、現在、鋭意練習中です。

Message

北海道文化財団の活動に携わってくださったアーティストや文化芸術関係者の皆さんから、文化創造への思いを込めたメッセージをお寄せいただきました。

©Tomohide Ikeya

ダンサー・振付家・演出家
アート体感教室派遣アーティスト

森山開次（もりやまかいじ）

北海道文化財団設立30周年おめでとうございます。2005年から2010年まで、北海道のさまざまな街で開催されたアート体感教室。たくさんの子どもたちと共に踊った体験は私の宝となりました。子どもたちは、一人一人がそれぞれの煌めくカラダと可能性を持っています。踊りを通じて子どもたちに踊る喜びを伝えたいと思っていましたが、みんなの放つ光に、私自身が輝く未来を見せてもらい、踊りの喜びを与えてもらいました。これからも、未来の扉を開く子どもたちにたくさんの輝きの場を与え続けてくださることを願っています。

一般社団法人AISプランニング代表理事
コーディネーターほか

漆崇博（うるしたかひろ）

私が初めて北海道文化財団さんと関わりを持たせていただいたのは2006年の文化の宅配便事業のコーディネートでした。それから約20年のお付き合いの中で、児童数が10名にも満たない学校や、離島でのワークショップ、私設の学童保育での取組など、普段文化芸術活動が入り込むことが困難な環境にアーティストの奇想天外なアイディアを届けていくその仕組みは、他の事業にはない可能性と特別なやりがいを感じるものでした。

北海道に暮らす人々にとって、文化芸術に触れる機会は決して平等に与えられているわけではありません。北海道文化財団の事業がこれからも様々な市町村にその触手を伸ばしていくことで、地域の特徴ある文化の維持・発展につながっていくことを願っています。

阿部典英（あべてんえい）

美術家
北海道文化団体協議会名誉会長

北海道の全ての人々が芸術文化の恵みを享受できる社会を願い、北海道文化財団は設立して30年の節目を迎えました。多々ある活動の中で、私は美術について述べさせていただきます。

美術は人の心の希望です。しかし、道内では、多くのギャラリーが閉鎖されております。そのような中、北海道文化財団事務所のアートスペースでは素晴らしい展覧会が開催されております。北海道の美術史にも残る、大変貴重な空間です。今後は、北海道の美術界を活性化させるためにも、若手中心のコンクール展を開催してはと考えております。

小島達子（こじまたつこ）

株式会社tatt代表取締役
演劇シーズンプログラムディレクターほか

北海道文化財団とは、2007年の北海道舞台塾『不思議の国の大人のアリス』出演以来、数々の公演でお世話になり、20年近いご縁となります。『ぐるぐる』シリーズでの道内ツアーは楽しい思い出です。役者としてだけでなく、道外からの公演招聘でも助成をいただき、質の高い舞台を札幌に届けることができました。道外の優れた作品を紹介し、北海道の文化芸術を高めてこられたことに深く感謝し、今後の企画も楽しみにしています。以前の劇作家大会のような企画もぜひまたお願いいたします。

山本卓卓（やまもとすぐる）

範宙遊泳代表
高校生のための劇作ワークショップ講師

これまでも私は、人と出会うように土地と出会ってきました。そのなかでも札幌には、とりわけ演劇への熱量の高さを感じます。もちろん、愛情は他と比べて計れるものではありません。それでも私にとって数年関わってきた札幌は、今も変わらず「かっこいい土地」です。それは、演劇を信じようとする力の強さにあるのだと思います。少なくとも私は、冷笑的な人よりも熱くあたたかい人が好きで、自分もそうありたいと思います。これからも、あらゆる諦観を跳ね退け、門外漢に夢を見させてください。

©雨宮透貴

清水友陽（しみずともあき）

公益財団法人北海道演劇財団芸術監督

私が最初にお世話になったのは、2002年に北海道舞台塾で演出家・劇作家の鐘下辰男氏の演出助手を担当した時です。鐘下さんほか、日本の演劇を牽引するスタッフ陣の現場に触れられた貴重な体験でした。今、北海道で演劇の仕事を続けているのは、この経験のおかげです。その後、北海道舞台塾、アドバイザー派遣事業で地域の方たちと触れ合うなかで、上演だけではない、演劇が持つ力を知りました。人と人とが出会い、創作する素晴らしさを、次の世代の人たちに伝えてゆけるよう、私もさらに精進します。30周年おめでとうございます。

ごまのはえ

ニットキャップシアター代表
第9回北海道戯曲賞大賞受賞作家

北海道文化財団30周年おめでとうございます。『チェーホフも鳥の名前』札幌&大空町公演ではたいへんお世話になりました。公演当日、会場にはかつて樺太で暮らした方々のご家族が沢山来てくださいました。本作の脚本は、サハリン／樺太について書かれた資料を基に作成しましたが、終演後のロビーでご家族の皆さんと言葉を交わすことで、作品に血肉を与えられたように感じました。これからも素敵な出会いを沢山設けてくださいませ。関西より応援しております!

和田由美（わだゆみ）

株式会社亜璃西社代表

不毛と言われた北の地で、“文化の華”が開花しつつあります。新芽をいち早く見い出す磯田憲一理事長をはじめ、北海道文化財団の皆様に心から敬意を表します。私事ですが、難病で逝去された演劇界の巨星・斎藤歩さんが2021年に取得された「アート選奨K基金賞」を翌年、わが亜璃西社が戴き、どれほど嬉しかったことか…。贈られたカンディハウスの椅子は、永遠の宝物です。今後も、北の文化をリードする財団であり続けて下さい。

太田晃正（おおたこうせい）

NPO法人ゆうアートコーディネーター
遠軽町芸術文化交流プラザ 館長

1998年（27年前）にトータルコーディネーターとして北海道文化財団に席を置いた。当時、道立劇場構想もまだあった時である。地域の劇場や文化施設も各市町村で計画され立ち始めた頃でもあった。

劇場って?舞台創造って?裏方技術って?イベント企画制作って?…なる講習会が各地で多く開かれアドバイザーとして発言を求められた。

地域の方々と話し合い計画に参加した。又、北海道文化財団も日本劇作家大会ほか、全国の各分野のアーティスト達と連携を取り、文化創造活動をした時期でもあった。

その内、行政的には指定管理者制度が発足し始めた。そして数年前にはコロナ問題が世界中を吹き荒れた。文化業界は衰退の一途を辿った数年であった。

今、少しづつ変化が起きている。もう少しだ頑張れって感じだ。北海道文化財団へのこれからの期待は更に大きい。文化は社会の背骨です。社会の変化を捉え、未来の視点をよくよく探って新たな物差しを作り北海道の文化創造に荷担し、想像への参画を願う。

三ツ井育子（みついいくこ）

深川市文化交流ホールみ・らい 館長

北海道文化財団設立30周年おめでとうございます。

深川市文化交流ホールみ・らいでは、北海道文化財団の「まちの文化創造事業」で共催することで、ジャズフェスティバルやダンス事業、わが街深川をテーマにした音楽物語、他ジャンルの文化団体と一緒に作った異色のコラボなど「市民参加事業」に取り組んで参りました。多い時は100人を超える参加者があり、振り返ると笑顔や涙、夢に向かう瞳に彩られた日々でした。長い間、地域の文化を支えてきた北海道文化財団には、ぜひ今後も各地域に足を運び、地域の実情に合った支援をしていただけるよう期待しています。

尾崎要（おざきかなめ）

舞台監督
株式会社アクトコール代表取締役

北海道立劇場建設構想があった2000年代初めの頃より北海道文化財団との関わりが始まりました。その頃は実験的な舞台芸術作品制作に取り組み、失敗も成功も経験しながら道立劇場建設に向けた方向にあったかと思います。残念ながら道立劇場の道は途絶えてしまいましたが、北海道文化財団においては、施設を持たない財団として、事業に関わる職員の方々がたくさんの情報取集や、芸術文化に関わる方々との関係づくりに積極的に活動されている姿を何度も拝見しております。

今後も舞台芸術支援に積極的に取り組んでいただける事を望んでおります。

井出祐子（いでゆうこ）

札幌オペラシンガーズ代表

北海道文化財団30周年おめでとうございます。この30年北海道の文化・芸術の発展は目まぐるしく、2018年に札幌文化芸術劇場hitaru（オペラ・バレエ上演可）が誕生しました。日本のオペラ界を代表する指導者（演出家・指揮者・コレペティトール）の下、オペラワークショップ（アドバイザー派遣事業）に参加した人達が、hitaru主催オペラ公演のオーディションに多数合格。アーティスト育成事業に感謝です。ワークショップでご縁を頂いた蘭越町の皆様と大自然の中で育った感性豊かな子どもたちと協働で「秋のアートまつり」を開催出来ましたこと、心よりお礼申し上げます。未来を担う子どもたち、若者達へのご支援を今後共宜しくお願い致します。

石川直樹（いしかわなおき）

写真家
アート体感教室派遣アーティスト

北海道文化財団の事業で道内のたくさんの場所に行きました。そこで出会った子どもたちとの思い出は、今も自分の胸に深く刻まれています。そのうちの少なくない人数の方々とは今も交流が続いていて、こうしたきっかけを作っていただいた財団の皆さまには感謝の念に堪えません。あの頃に子どもたちと一緒に作った冊子の数々を時々見返しながら、時々記憶の引き出しを開け、想像を膨らませています。地域に根差した密な取組は、今後ますます重要になっていくでしょう。ぜひ末永く活動を続けていってくださいませ。